

現代の労働

根橋 正一

はじめに

ポストモダン、ポストフォーディズムといわれる現代社会の労働状況は、人びとの困難を増幅している。経済的格差の拡大、非正規雇用の増大、ワーキングプアの増大、さらに福祉産業労働、観光サービス産業労働についても情動労働あるいは感情労働といった新たな質の労働が従業者に課せられる労働のスタイルとなり、社会学や社会福祉学、観光学の研究課題として浮上している。

1970年代欧米先進国が足を踏み入れた脱産業社会への道は、遅れること20年1990年代以降の日本の進む道ともなった。1980年代欧米諸国が自国内における工業生産を他地域に移転するなかで、日本を中心とするアジア諸国の工業化は驚異的な発展を見せ、アジアの4恐龍（韓国・台湾・香港・シンガポール）が世界の工業生産を支えた。新国際経済秩序（NIEO: New International Economic Order）と呼ばれる世界経済分業体制が形成された。その契機となったのは、1968・69年の欧米における労働者・市民・学生による反疎外、反公害（環境）の諸運動であった。1970年代フランス、イタリア、アメリカをはじめとした先進工業諸国は工業の海外移転を行い脱工業社会への社会的変化をもたらされた。その期に乗じて、日本やドイツはさらなる工業化への道を歩んだ。日本は、疎外された工場労働を徹底的な技術革新で乗り越えようとした。すなわち、機械化、オートメーション化、コンピュータ化によって工場における疎外労働から労働者を解放し、公害問題に対しては環境破壊を防止する技術開発することによって対抗したのである。よりよい技術、技術革新によって人間を労働疎外から、自然を公害から解放することによってさらなる工業力、工業生産力発展を可能にしようとしたのである。

1980年代以降世界の工業生産の拠点としての地位を確立してきたアジアは、さらに社会主義国から世界資本主義への参入へと方向転換したベトナムや中国を巻き込んで、世界の工場の名を高めていった。アジア地域内における諸国間の工業競争は、技術力、低

賃金労働力、生産・流通コスト、最適な利潤を求めて技術や工場を移転し続けることになった。

他方、脱産業化した欧米諸国は、ポストモダン社会、消費社会へと突入し、新たな中心産業の発展を促し、独自の社会態勢を形成していった。近代化、工業化、都市化のために破壊され改造され続けてきた自然や歴史遺産は保護・保存の対象へと180度変更され、自然的なものも、文化的、歴史的なものも新たに富を産み出す資源としての地位を得て、新たな産業を興隆させる役割を担わされることになった。工業におけるイノベーション力、消費力をもつ欧米先進諸国は、アジアや中南米などにおける工場生産によって提供される大量の商品を消費しつつ、新たな巨大消費システムの開発、人びとの娯楽や暇つぶしを富に換える産業を発展させた。これら最先進諸国は消費社会として、生産の方向性を決定する消費力と巨大な第3次産業、つまりサービス産業、商業、暇つぶし産業を中心とする社会となり、工業国の上に君臨することになった。これが、脱産業社会、ポストフォードイズム産業、ポストモダンなどと呼ばれることになるのである。

日本が欧米から20年遅れてポストモダン社会に入るのは、ユネスコを舞台にした世界遺産条約への対応によく表れている。世界遺産条約は1972年に締結されたが、日本がこれに参加するのは20年後の1992年であった。近代化や工業化の発展のためには自然や歴史の遺産を破壊するのは仕方ないこと、当然の選択であるという考え方から、これらの保護、保存を最重要なことと考え、さらに保護保存した自然や歴史遺産が新たな産業の資源、つまり富を産み出す基となることのメリットの発見へと変化したのであった。

ポスト産業社会においても人々の生活を豊かにし、便利にする工業製品を必要としているし、新たな経済活動、経済システムを作動させるのに必要なアイテムである商品、工業製品は不可欠であるから工場はよりコストパフォーマンスの良い地域を求め、より低賃金労働力を求めて生産の場を移動し続けることになり、国際経済分業の拡大であるグローバル化はさらに加速度を増す。こうした経済システムの変化に伴って、人びとが従事する労働もまた質的にも量的にも変化する。かつて産業の時代、人びとは工場労働者として商品生産に労働力をつぎ込み、商品を流通させ、販売する労働に従事していた。これに対して、ポストモダンの人びとの労働は、消費者ニーズに合わせた商品生産を企画デザインすること、外国の工場で生産された商品を効率よく販売することであり、娯楽・暇つぶし産業で人びとを楽しませることである。言い換えれば、デザイン・企画、販売、娯楽提供による価値実現が、ポストモダン社会の労働の中心になってきたのである。かつての産業社会の労働の中心は富・価値の生産であったが、その価値生産過程を海外の工業地域に押し付けた脱産業社会は、他地域生産の商品を用いて価値実現過程を主要な労働としているということが出来る。

こうした現代の労働について考えるのが本論の目的である。1章では、ポストモダン時代の産業と労働の特徴についてM・ハートとA・ネグリの3部作と呼ばれる『帝国』

『マルチチュード』『コモンウエルス』を中心に整理する。2章では、現代社会において専門職化、資格化して大きな産業に成長している福祉・保育産業における福祉・介護労働や看護労働における現代的な諸問題について述べる。そのなかで、エヴァ・キティの著作における「依存と依存労働」に関する正義論に言及する。3章では、現代の労働の特徴を感情労働」としてとらえ、その疎外に関して先駆的な研究となったホックシールドの研究を整理する。疎外論の変遷についても整理し、感情労働の疎外理解に資する。

1章 ポストモダン労働

1. モダン労働からポストモダン労働へ

欧米先進諸国においてモダンが批判され、ポストモダン社会への移行が始まったのは1970年代であった。それは、モダンが批判され、モダンな産業の在り方が「疎外と公害」の視点から批判されたことに端を発する。1968年以降の市民・労働者・学生たちによる諸運動、異議申し立て運動から表面化した。

ネグリとハートは労働者・学生運動を念頭に置きながら、「1968年以降私たちは新たな時代へと足を踏み込んだ¹⁾」と述べている。すなわち、人びとは「労働の拒否」を訴えて労働者の闘争と社会闘争という新たな社会関係を先取りする提案をおこなったのである。労働の拒否は次のような形で表明された²⁾。

- ①大規模工業の規律や賃金体系に従属した労働への個人による拒否。
- ②テーラー主義的工場の抽象的労働とフォーディズムの社会関係のシステムに統制された要求＝必要性の体制とが社会的再生産の法則の大衆的拒否。
- ③ケインジアンの社会的再生産の法則の全般的拒否。

これら新たな時代の「拒否」に対する資本の再構築の過程には、次のような3つの応答が特徴的に出現した³⁾。

- ①個人的労働の拒否に対して、資本は工場にオートメーションを導入した。
- ②アソシエーション的な労働の共働関係を切断する集団的拒否に対しては、資本は生産的社会関係のコンピュータ化を推進した。
- ③社会的な賃金規律の全般的拒否への対応として、資本は企業の特権化する貨幣のフローによって統制された消費の体制を導入した。

1) Antonio Negri & Michael Hardt, 1994, *Labor of Dionysus: A Critique the State-Form*, Regent of the University of Minnesota = 永原豊他訳, 2008年『ディオニソスの労働—国家形態批判』人文書院, 350ページ

2) 同上書, 350ページ

3) 同上書, 351ページ

1960年代から70年代にかけての闘争を鎮静化させ、指令を再編成するために資本は二つの道筋を開らいていった。第1の道筋は、抑圧的な選択肢であり、根本的に保守的な作戦であった。社会的な移動と流動性を管理することによって達成された。この戦略の中心的な武器は、生産のオートメーション化とコンピュータ化を含むテクノロジーの抑圧的な活用であった⁴⁾。それと同時に模索された第2の道筋は、抑圧を目指すのではなくプロレタリアートの組み立てを変化させること、そしてそれによって生じた新たな実践と形態を統合・支配・利用することを目指すものであった。

このシフトを理解するために、1960年代アメリカにおける諸運動の出現とその理念を整理しておくのが有用である。その当時のアメリカ合衆国では、やる気のないアフリカ系アメリカ人は可能な限りの手立てを尽くして労働を拒否した。若者は工場と社会のうんざりする繰り返しを拒否して移動性と柔軟性からなる生活スタイルを創出した。学生運動は、知識と知的労働に高い社会的価値を与えるよう求めた。フェミニストの運動は「個人的な」関係の中に含まれている政治的な関係を明らかにし、また家父長的規律を拒否して、伝統的に女性の労働とみなされてきた事柄の社会的価値を増大させた。これは情動労働ないしは介護労働の高度な内容を含むものであり、社会的再生産に必要な様々なサービスを中心とするものであった。これらの運動の価値を示す指標、すなわち移動性、柔軟性、知識、コミュニケーション、共働、情動的なものが、今後数十年間の資本主義生産の変革をいかなる仕方で規定するかを検討することになる⁵⁾。

こうした欧米先進諸国における諸運動のあり方が資本のあり方を模索させたのである。新しい世界のなかで、繁栄することのできる資本の配置は、労働力の非物質的、協調的、コミュニケーション的、そして情動的な新しい組み立てに適合し、またそれを支配することを可能なものに限られる⁶⁾。こうして、ポストモダンあるいは情報化の過程は、工業からサービス業（第3次産業）への労働力移動によって示されてきた。例えば支配的な資本主義国アメリカにおいては、1970年代からサービス業、すなわち健康維持から教育、金融、運輸、娯楽、広告にいたるまでの広い活動範囲の産業が台頭してきたのである。ここでさらに重要なのは、これらの職業を特徴づける中心的な役割が知識、情報、情動、コミュニケーションにおかれているということである。その意味で、ポスト工業化の経済を情報化の経済と呼んでいるのである⁷⁾。

4) Michael Hardt & Antonio Negri, 2000, *EMPIRE*, Harvard University Press = 水嶋一憲 他訳, 2003年『〈帝国〉 グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社, 347ページ

5) 同上書, 355-356ページ

6) 同上書, 358ページ

7) 同上書, 369ページ

情動労働の出現と拡大

情報経済への移行は、必然的に労働の質と本姓の変化をとまなっている。工場労働の特徴は、フォーティズムからトヨティズム的モデルへの変化として現れた。トヨティズムにおいては、生産のプランニングは間断なく、直接に市場とコミュニケーションし、工場は在庫ゼロを維持し、商品は市場のその時々需要にしたがって、ジャスト・イン・タイムで生産される。理論上は、生産の決定が市場による決定よりも後に、その反応としてなされるのである。つまり、商品の消費者がすでにそれを選んで購入を決めてから生産されるのである。このことは、コミュニケーションと生産が新しい中心的役割を演じるようになったことを意味している⁸⁾。

サービス部門は、さらにつよく情報と知識の絶え間のない交換にもとづいているのであり、サービスの生産が結果的に物質的財や耐久財ではないから、こうした生産にたずさわる労働を非物質的労働と定義する⁹⁾。非物質的労働別の側面としては、人間の接触や相互作用がもたらす情動に関わる労働ということである。たとえば、健康維持に関するサービス、娯楽産業も情動を作り出したり操作したりすることに焦点を合わせている。これらの労働は、その生産物が手で触れることのできないもの、すなわち安心や、幸福感や、満足や、興奮や、情熱といった感情であり、やはり非物質的なものということができる¹⁰⁾。

非物質的労働の第2の側面、すなわち情動に関わる側面は、コンピュータによって定義される情報知識とコミュニケーションのモデルを大きく超えて広がっている。情動に関わる労働、例えばケア労働は身体的・肉体的な領域に属するが、生産する情動は非物質的なものである。つまり、情動に関わる労働が生み出すものは社会的ネットワークであり、コミュニティの諸形態であり、生権力なのである。こうして、情報経済の頂点にあるサービス部門を動かしている非物質的な労働の3つのタイプを区別することができる。

第1のタイプ：工業生産に含まれるもので、その過程は情報化され、コミュニケーションテクノロジーを組み込むようになり、耐久消費財生産の物質的労働も非物質的労働へと向かう。第2のタイプ：分析的でシンボルを扱う作業という非物質的労働。第3のタイプ：情動の生産という操作を含むもので、人間的接触、身体的様式における労働を要求する¹¹⁾。これらが、グローバル経済のポストモダン化を推し進めている3つのタイプの労働である。

8) 同上書, 373-374ページ

9) 同上書, 375ページ

10) 同上書, 377ページ

11) 同上書, 378ページ

2. マルチチュードと労働

ネグリとハートはその三部作の第2作『マルチチュード¹²⁾』において、マルチチュードの運命となっている労働として現代の労働について論じている。

マルチチュード

まず、マルチチュードについて整理しておこう。マルチチュードは階級概念である。これまで、経済的階級概念は統一性か多様性かの二者択一を迫られるのが常であった。統一性の立場は、マルクスの主張に関係づけられ、資本主義社会では資本と生産財を所有する者とならない者の分裂という視点から資本家とプロレタリアートという階級カテゴリーに収斂するという主張である。他方、多様性の立場は、社会階級が多様であることは避けられないという自由主義的議論である。すなわち、人種、民族性、地理的配置、ジェンダー、マイノリティーなどさまざまな要因にもとづく無数の階級によって構成されると主張する。ネグリとハートはこの統一性か多様性かという二者択一を不要にする「マルチチュード」という概念を提案している¹³⁾。

19～20世紀の労働者階級概念では、労働者とは工業労働者のみをさすため、それ以外の労働する階級は排除される。また賃金労働者をさす場合には、賃金収入のない階級は排除された。具体的には、工業労働に対する出産・子育てにまつわる女性が担当した再生産労働、農業労働者、失業者、貧者などが排除されたのである。これに対して、マルチチュードの概念は、「資本の支配のもとで労働し生産するすべての人びと」という最も包括的な定義が与えられる¹⁴⁾。

マルチチュードの労働

現代のポストモダン的な社会的生において古い同一性が崩壊しているのは事実である。例えば、支配諸国における工場労働者という凝集したアイデンティティが単位契約労働の増加や新しい労働形態に特徴的な強制された移動性によって崩れつつあることや、移民による労働力移動によって国民的アイデンティティとか伝統的概念が脅かされ、家族のアイデンティティが変化しつつあることなどについて考察する。

グローバル化時代のマルチチュードの労働について整理してみよう。19～20世紀にかけての工業労働は、農業のような他の生産形態に比べ少数派にとどまっていたものの、

12) Michel Hardt & Antonio Negri, 2004, *MULTITUDE: War and Democracy in the Empire*, Penguin Press, = 幾島幸子訳, 2005年, 『マルチチュード—〈帝国〉時代の戦争と民主主義— (上・下)』NHK出版

13) 同上書 (上), 178ページ

14) 同上書 (上), 182-183ページ

グローバル経済においては、主導的な立場を占めていた。しかし、20世紀の末の数十年間、工業労働はその主導権を失い、代わりに「非物質的労働」が主導権をにぎった。非物質的労働には二つの基本的な形態がある。第1の形態は、問題解決や象徴的・分析的な作業、そして言語的表現といった、主として知的ないしは言語的な労働である。アイコンやシンボル、コード、テキスト、言語形象、イメージ、その他の生産物を産み出す労働形態である。もう一つの主要形態は、「情動労働」と呼ぶべきもので、心的現象である感情とは異なり、情動とは精神と身体の両方に等しく関連する。情動労働は、安心感や幸福感、満足、興奮、情熱といった情動を生み出したり、操作したりする労働である。具体的には、弁護士補助員、フライトアテンダント、ファーストフード店の店員といった仕事に情動労働を見出すことができる。支配諸国において情動労働の重要性が増していることは、例えば雇用者が被雇用者に対して教育や好ましい態度、性格、「向社会的」行動を主要なスキルとして強調し、それらを身につけるよう要求する傾向に現われている。好ましい態度と社会的なスキルを身につけた労働者とは、情動労働に熟達した労働者と同義である¹⁵⁾。

資本の支配のもとで働くすべての人びとを意味するマルチチュードが従事する現代の労働のなかで非物質的労働の占める重要性は大きくなっており、このなかで新たな労働分業にもとづいた階級・格差が出現している。すなわち、前述の第1形態の労働は多くの生産物を創出する知的労働であり、比較的支配的な階級を構成する。これに対して、第2の形態は大量のマルチチュードが従事する情動労働で直接顧客と対面して感情を創出したり操作したりする労働である。すなわち、サービス労働やケア労働で、比較的従属的で低賃金の労働である。

『コモンウェルス』

ネグリとハートはその第3作『コモンウェルス—〈帝国〉を超える革命論¹⁶⁾』で、現代の資本主義的生産が生政治的なものになりつつあると論じている。労働の特徴については、次のような三つの動向に整理しており、我々の社会においても最近顕著になってきた労働の現状も重なっている。

現代の労働の3つの動向

世界の多くの地域で進行している労働の変容について、三つの主要な動向がある¹⁷⁾。

15) 同上書、184-185ページ

16) Micheal Hardt & Antonio Negri, 2009, *COMMONWEALTH*, =水嶋一憲監訳, 2012年, 『コモンウェルス—〈帝国〉を超える革命論—(上・下)』NHK出版

17) 同上書(上), 216-220ページ

第1の動向：資本主義的価値増殖過程における非物質的生産ヘゲモニーの出現、あるいは拡大の動向。例えば、イメージ、情報、知識、情動、コード、社会関係などは今や、物質的商品や商品の物質的側面より重要になりつつある。物質的財の価値が非物質的要因や非物質財に依存する、あるいは従属する度合いが増大している。これら非物質財・物質財の非物質的側面を生産する労働の形態にはサービス労働、情動労働、認知労働などの形態が含まれる。知的・情動的労働は人間の身体と精神の全体を必要とする労働である。

第2の動向：労働の女性化である。この動向には三つの変化が含まれる。一つ目は、量的変化、つまり世界の支配的地域、従属的地域とともに、賃金労働市場における女性の割合が急速に増加している。二つ目は、男女両方ともに労働日の質の変化、労働の時間的なフレキシビリティにも変化が起きている。パートタイムや非正規雇用、不規則な労働時間、複数の仕事のかげもちなど、長い間従属国に定型的な労働が支配国でも一般的になってきた。三つめは、従来女性の仕事とされてきた情動的、感情的あるいは人間関係に関わる仕事の特性が、今やすべての労働部門で重要性を増しつつあることだ。資本主義的生産が商品だけでなく、社会関係や生の形態を目的にする度合いが増す中、生産労働と再生産労働という伝統的な区分は崩壊しつつある。労働時間と生活時間という時間的区分がつかなくなり、労働の生産的な力能は社会的生を生み出す力能へと変容しつつある。

現代においても、ジェンダー平等はいまだ達成されていないばかりか、ジェンダー分業も打ち壊されてもいない。それどころか、情動的労働はジェンダー的に不平等な形で女性に求められているのが現状である。いつでも情動労働、つまりにこやかに微笑み、傷ついた心を癒し、人間関係を円滑化し、一般にケアや養育と呼ばれる仕事に従事する気のない女性は一種のモンスターとみなされ、加えて女性たちは賃労働に大規模参入しながらも依然として家事や育児など家庭内における無給の再生産労働の主たる担い手であり続けている。労働の女性化は、労働や生政治的になることを理解したほうがより有用である。

第3の動向：労働者の移動、すなわち新たな移住パターンや社会的・人種的混交のプロセスがもたらした結果生じたものである。支配諸国の資本主義的企業は、国内労働力を補うためにあらゆるレベルにおいて合法・不法両方の移民労働者の恒常的な流入を必要としている。同時に、労働市場には、質的变化が起きている。労働移動の流れのなかで、女性が占める比率の増加にかかわる変化があるのだ。家庭内労働、性労働、高齢者介護、養育などに就くケースと、電子機器、繊維製品、履物、玩具など高度な技術を必要としない労働者集約製造部門で働くケースの両方がある。この変化は、労働の女性化と軌を一にしており、そこには〈南〉の女性たちは「器用な手先」を持つという人種的ステレオタイプがつきまとっている。

ネグリとハートは一連の文献において、現代すなわちポストモダン、ポストフォー

ディズム、脱産業、グローバル化の時代などと呼ばれる時代の労働について、国際的な視野から記述している。日本のような1990年代中ごろ以降産業社会からポストモダン社会へ移行した社会にも適応できる見方である。

2章 依存労働と依存的人間論

前章でみてきたように現代のポストモダン状況における労働は、サービス労働、介護・保育やケアに関わる労働などがより大きな部分を占めるようになってきている。そんな中で福祉に関わる労働は、産業化し、その仕事は専門職化、資格化して社会的威信を高め、社会的に認知された産業へのステップアップに力を注いだにも関わらず、それに従事する労働者にとっては収入の点においても威信の点においても十分な成果を得ているとは言い難い。本章ではその原因についてジェンダー論的な視点から考察する。そのためにもまず、近代産業社会で専門職として成功した医学を基礎とした医療産業の他に、法学をベースとした法曹界、法律産業、教育産業、官僚集団について意識する。そのうえで、福祉産業についてその構造を明らかにし、社会変革の道について考察する。

1. 近代産業社会で成功した専門職産業

近代産業社会における労働は、属性主義から業績主義へ、特権制度から専門的実力主義へと移行すると総括される。R.コリンズ『資格社会¹⁸⁾』にしたがってアメリカの産業化における専門職化、資格化した産業について述べていく。

(1) 専門職化

コリンズによれば、各専門職業と各関連職業は最も急速に成長した部門であった。すなわちそれらの職業は1900年の4.3%から1970年の14.2%に拡大した。教職、工学、科学、医学、法学などの伝統的職業が膨張してきただけでなく、他の職業も格上げされた新しい専門職業が出現してきたからである。今や社会福祉士や公認不動産業者も専門職業である¹⁹⁾。

アメリカでは19世紀末になるまで伝統的な専門職業閉鎖的団体支配の解体と全体的な職業機会の民主化の方向に進んでいた。しかしその後20世紀の専門職団体の台頭は、専門職は自己規制的な共同体であることを強調していた。その専門性を外部の干渉を受け

18) Rondall Collins, 1979, *The Credential Society: an Historical Sociology of Education and Stratification*, Academic press = 新堀迪也監訳, 1984年, 『資格社会—教育と階層の歴史社会学』東信堂

19) 同上書, 173ページ

ず、自らの基準によって実践する倫理綱領を有し、その職務を人類への奉仕に献身し、利潤非追求と有能な職務履行を誓約し、商業主義と出世主義を非とする専門職団体が台頭してきたのである。これら専門職団体の理想的な定義は、とくに医学から導かれており、科学・法学・建築学に拡大していった。この原則の適用が困難であるにもかかわらず技術者や教員にも拡大されていった²⁰⁾。専門職の愛他的倫理綱領は、顧客の潜在的な不振に対する防御壁であった。重要な技能を独占し、その適用の成功・失敗を判断する権利を持つ職業は、それに依存せざるを得ない人々の反感を誘発する。医者や弁護士を依頼するとき顧客は無力であり、取り乱している。そして成果は疑わしい、つまり病気は回復せず、事件は勝訴できないかもしれない。不満足な顧客の怒りから身を守るために、職業集団は厳格な基準を公表していたのだ。

専門職となった医学、法学、工学、教職などが成功してきた事例である。このうちアメリカの医学ではどのように専門職化が展開してきたのかについてみていこう。

(2) 医学の独占形態

19世紀後半以前内科医の独占的な地位と高い名声は、それが実際に病気を治療し、苦痛を軽減するとの主張にもとづいた限りにおいては、詐欺行為を基盤にしたものであった。1850年以降の科学的進歩は、科学の進歩は異種類の疾病間の区別を可能にし、伝染に対する理解、防腐剤の開発、流行病予防の公衆衛生の重要性に関する認識に到達した。1870年以降、効果的な医学がヨーロッパで発展し始めた。そして疾病率を減少させた公衆衛生活動に献身し、同時に効果的・愛他的な職業として再建された。医学教育がシステム化され、大学医学部が創設され、人間を病界から解放し、やぶ医者を一掃する専門職的な愛他的・科学的医師のイメージが形成されていった²¹⁾。

20世紀初頭地方企業から始まる運動によって成立する自由取引制限に関する諸法律が、各専門職協会にも有利に働き、アメリカ医学協会はこの波に乗じて独占的地位を確立していった。そして、各医学会は試験・資格認定委員会を多くの州に成立させた。さらに、医師免許州委員会全国会議を発足させ、免許の統一化の実現を進めた。大学における医学教育の質的統一も実現した²²⁾。19世紀まで病気治療は家庭で行うのが一般的であったが、20世紀に入るところには入院治療に大きく依存するようになり、病院数が大幅に増加し、多くの医師が病院勤務医となった。それとともに伝統的な慈善的医療から個人の経費支払患者重視へと変化していった。アメリカにおける医学研究は、大学院研究の課題となり学位取得後に病院での訓練が行われるシステムになった。病院でのインターンなどを通

20) 同上書、173-174ページ

21) 同上書、183-189ページ

22) 同上書、188-189ページ

して医学上の実質的・実地的な技能は実務を通して習得されることになったのである²³⁾。長期的で経費を要する競争移動型のアメリカの教育制度は、ますます強化された。

こうしたプロセスを経て権限・地位・経済的利益の観点からみてアメリカの医学会は近代産業社会において専門職の医療産業として成功を収めたのである。

2. 福祉産業とジェンダー労働

20世紀後半に専門職産業としての確立を目指して資格化、資格教育の体系化の形を整えようとしてきたケア労働、介護労働、保育労働などを含む福祉産業がそれに成功しなかったのはなぜか、というわれわれの問題に立ち返ろう。エヴァ・キティは『愛情労働²⁴⁾』で、福祉労働のジェンダー的側面に注目して、その格差、差別のある労働について分析している。

前述した専門職産業として成功した医学領域の医療産業においても、医師として働く男性のほかにも多くの女性が看護婦（看護師）として働いているが、彼女たちの専門職としての労働にもかかわらず閉鎖的・従属的な地位、伝統的な卑しい地位の女性差別しか与えられていなかったのが、1970年代のアメリカであった。女性を医者への地位へという名目的統合は見られたにせよ、別個の領域としての看護婦の存在は本質的には同性だけの職業となり、医療権限体系で昇進する道もなく、性別階層の遺産はそのまま残されていた。看護婦は教育要件や機構内部の地位体系とともに、次第に「専門職」化されてはきたが、従属的地位はむしろ強化されていた²⁵⁾。

(1) 依存労働の構造

キティは福祉労働やケア労働などと呼ばれる福祉産業や医療産業における労働の考察を「依存」から始める。

不可避の依存、乳幼児期の未発達な状態、どんなに行き届いた環境においてもその人から機能を奪う病気や障碍、老衰などがある。こうした無力な状態は、意思や欲望によって引き起こされるのではなく、社会的環境と相まって生物学的要素によって引き起こされる。また私たちは依存者になりうる。乳幼児期を過ぎてもお子どもは成長するために依存に頼らねばならない。命にかかわる病気でもとも一定期間依存者になる場合もある。比較的軽度の障害でも環境によっては生涯にわたって、

23) 同上書、191ページ

24) Eva Feder Kittay, 1999, *Love's Labor: Essays on Women, Equality and Dependency*, Routledge
= 岡野八代・牟田和恵監訳、2010年、『愛の労働—あるいは依存とケアの正義論』白澤社

25) コリンズ、前掲書、192ページ

あるいは一時的に深刻な依存者になる可能性もある²⁶⁾。

ここで依存の状態は人びとの人生において例外的な状況に過ぎないと考えるのは間違っていることが強調されている。そして、依存者の脆弱さに対しては誰かが必ずそのニーズを満たさなければ、生存が脅かされることになる。依存者の世話をする仕事を依存労働、あるいは依存ケアと呼ぶことができる。

依存労働は、伝統的に女性が従事してきた活動と共通する特徴を持っている。例えば、ケアと性的な要素を含む愛情労働 (affection labor) は依存労働と共通した特徴をもつし、家事のような家内労働もしばしば依存労働として連続的に行われる。依存労働は、家庭内だけでなく託児所や病院でも行われる。どこで行われるにしても、愛情労働や家内労働が女性に割り振られるところでは、依存労働もジェンダーによって割り振られる²⁷⁾。すなわち、依存労働は、それぞれの社会における愛情労働やケア労働のジェンダー分担の原則に沿って割り振られるのだ。

依存労働をめぐる構造についてさらに立ち入って考えてみよう。依存者は他者のケア・保護・管理・支援などを必要として、それを委ねられた被保護者でもある。依存労働者は、依存労働をおこなう人びとであり、その労働と注意を対象の受益者＝被保護者に向けケアや支援を提供する。依存労働者と依存者との関係は、依存からなる関係で、依存関係あるいは依存的関係性と呼ぶことができる。依存労働はこのほかに、被保護者ケアや管理を任される、あるいはそれを請け負う第三者がいる。しかし、依存者 (被保護者) にはそうした委託する能力や権限がないことがあり、その場合にはその人のケアは誰かが任命されることになる。²⁸⁾

(2) 依存関係における権力の不平等性

依存労働をめぐる関係性においては不平等さや支配関係に転じやすい構造がある。依存労働者も依存者もどちらも依存関係を支配関係に換えてしまう可能性を持っている。すなわち、依存労働者は弱い依存者・被保護者を虐待しやすい立場にあり、逆に被保護者が不正な要求をしたり横暴にふるまったりすることもある。依存労働者の虐待的な行為は道徳的に強く非難される。また、被扶養者側は、不正な要求をすることによって、また関係を通して生まれるつながりに乗じて、依存労働者の思いやりや配慮、義務を搾取することによって一種の専制を發揮しうるのだ。²⁹⁾被保護者の地位が依存労働者より

26) キティ、前掲書、81-82ページ

27) 同上書、83ページ

28) 同上書、84ページ

29) 同上書、90ページ

も高い場合にはより深刻になる。

依存労働が専門職化、資格化しつつあるにもかかわらず依存労働の福祉産業やその他のサービス産業が、社会において従属的な地位から脱することのできない理由の一つはここにある。すなわち、依存労働が被保護者の地位に比べて低い女性たちによって担われているからである。

依存労働を母親や姉妹、妻、娘、看護婦といった役割において大部分引き受けているのは女性である。また、女性が貧困や虐待、従属的立場にさらされてきたのも依存労働者としての役割においてである。女性が経済的搾取だけでなく、精神的・性的・その他身体的虐待に会うのは家父長的婚姻、すなわち稼ぎ手とケア提供者の役割がジェンダーによって決定されている結婚においてである³⁰⁾。

依存労働が社会化され自律的な自由な公的な産業的空間における労働であるという原則は完成されているわけではなく、依存労働者は搾取され従属的立場に立たされている弱者であり続けている。

ジェンダーの労働の特徴をもつ依存労働の不平等性は核家族内の人間関係を反映しているということもできる。つまりこうである。生産の領域と家庭領域とが分離した社会における核家族では、公的経済活動に参加する一人の成人＝稼ぎ手が家長となり、家族内の依存者、依存者を世話する依存労働者のために、家庭外でしか手に入らない資源を稼いでくる。家庭内で稼ぎ手と依存労働者の間には不公平な状況が生まれやすく、そうなった時は依存労働者側がぎりぎりまでひどい状況に耐えたり、決裂に際しては不利な立場におかれたりすることもある³¹⁾。依存者のニーズを満たすべく構想されている核家族には2種類の不平等がある。すなわち、一つは被保護者と依存労働者との能力の不平等であり、他の一つは依存関係にある構成員（子ども）と稼ぎ手との権力の不平等である³²⁾。

(3) 依存的人間論にもとづく社会

公的な労働現場ばかりでなく家庭内においても不平等とそれにもとづく支配関係におおわれている社会を平等で非支配的な関係に改造することが現代の課題の一つである。キティは、依存的人間観に基づく理念を提案しているこれは注目に値する提案と考えられるのでここで整理する。

30) 同上書, 100ページ

31) 同上書, 104ページ

32) 同上書, 106ページ

キティは、ロールズの正義論について次のように整理したうえで、それとは視点の異なる提案を行う³³⁾。ロールズによれば、秩序だった社会における平等な市民というのは、「すべての人が正義の原理を尊重する能力と全生涯を通じて十分に社会的協働が可能な成員である」と理念化される。この定義では、「例外的に高価な医療を必要とする人」のような厄介な事例を顧みることはなく、障害者や特別の健康上のニーズを抱える人のような「困難な事例」は「道徳的に優位ではなく」「同情と不安をあおるような私たちからかけ離れた人々の運命に向けさせて道徳的な能力をかく乱してしまう」から除外するのが正当である。このロールズの立場からみれば、ある割合の人びとがある時点において依存状態にあることは、その人びとが必ずしも平等な人格と認められないことを意味しない。というのは、その人々は生涯の別の時点では平等であるかもしれないからである。未成年である間や障害を抱えている間は、潜在的にのみ平等な市民であるとしても、原初状態においては合理的で十全に働きうる当事者として平等な能力を持ち、対等に位置づけられるものとして代表されることになる。

こうした立場に対してキティは依存的人間を人間の状態とする視点から命題を書き換えてみせる。市民当事者は自らある時点では依存者であり、また別の時点では依存に責任を負っているかもしれない、という知識を持って原初状態という「交渉のテーブル」につくことができる。ここで当事者が代表しているのは「潜在的な依存」であり「潜在的な依存労働」の可能性である。正常な能力をもち、合理的・自立的な代表として原初的な交渉のテーブルにつくとしても、依存者は原初状態の当事者によって代表されなければならない。

依存が正義の環境の一つとして認識されれば、依存者は幼児期のように依存期間であっても、心身がしっかりしている市民として代表されることになる。もし自分が原初状態における当事者だったらと想像するならば、他人に依存する期間があるだろうから、自分が依存している間の自分の利害が保護されるような正義の原理を選びたいと思うだろう。さらに、私は自分が常に依存状態にあるとは限らないと考えるだろうから、依存状態での利害関心と、十分に働きうる状態での利害関心とのバランスが取れるような原理を望むだろう³⁴⁾。

キティが構想する依存的人間にもとづく社会の原理はこうである。

この原理は、人は同程度に弱さをもつという前提にもとづくのでもなく、合理性や

33) 同上書, 204-213ページ

34) 同上書, 207ページ

正義感覚、自身の全の展望を同じように有しているという前提にもとづいているのではない。人はそれぞれ依存や依存労働を必要とする度合いが違うこと、困窮している他者に応答する道徳的能力があること、また幸福と福祉にとって人間関係が中心にあることにもとづくだろう。ケアに対する社会的な責任の原理は以下のようになる。ケアを必要とするそれぞれの人びとのニーズにしたがって各人に、ケアできる能力にしたがって各人から、またケアを与える人々に資源と機会が利用できるように社会制度からの援助が与えられることで、すべての人が持続可能な関係の中で適切にケアが受けられる——このようなあり方である³⁵⁾。

人は誰でも依存することは当然であり、ケアを必要とすること、ケアを得ることを当然のこととして考え、運営する社会が目標になる。かつて公的な男社会の労働現場で、病気やけがでさえもケアを必要とする存在になることはその組織での死を意味していた。組織にとって依存者は不要な存在であり、追放されるのが当然であった。しかし人が本質的に依存的存在であるとすれば、当然組織の運営はそれを勘案した運営を構築していくことになる。組織成員の家族に依存やケアの必要が生じたときも同様に組織として対応することが求められることになる。社会全体がその原理で運営されるとき、新たな平等と正義の社会が現れる。

3章 感情労働の疎外論

前二つの章でみてきたように非物質的労働や依存労働というようなポストモダンの労働について、労働疎外の視点から検討するのが本章の課題である。産業社会から脱産業社会へ、モダンからポストモダンへの移行の契機となった1968-9年の世界各地における労働者・市民・学生運動の主要な 이슈が「疎外と公害」であったことに鑑みれば、ポストモダンに特徴的な労働が疎外的かもしくは疎外から自由かという問いは、必然的なものといえる。人間性を破壊する労働疎外、自然や生きる環境を破壊する公害という近代が直面した2つの大きな壁によって、ポストモダンへの道を歩み、情報産業やサービス産業における非物質的労働やケア労働に移行してきた現代についての考察は、再び「労働疎外」の視点から行う意義も価値もあるのである。ここでは、まずマルクスが発見した工場労働における労働疎外、その後ブルーカラー以上に増大したホワイトカラーの疎外について振り返り、ポストモダンに特徴的な感情労働における疎外についてみていく。

35) 同上書、254ページ

1. 近代産業における労働疎外

(1) 工場労働者の疎外

青年ヘーゲル学派とみなされる若きマルクスは、ヘーゲルの精神現象学の指向を逆転させ、活用して、近代工場労働者の労働過程を対象とし労働疎外・人間疎外論の理論を打ち立てた³⁶⁾。マルクスの疎外論は、労働者の商品からの疎外を出発点として4つの形態があると論じられる。

疎外の第1形態：労働者の窮乏化と商品化の根本原因は、第1に労働が生産する対象、つまり労働の生産物＝商品が一つの疎遠な存在として、生産者から独立した力として労働と対立することにある。これが疎外の第1の形態であり、労働生産物（商品）からの労働者の疎外と呼ばれる。

「労働の生産物は、対象の中に固定化され事物化された労働であり、労働の対象化である。労働の実現は労働の対象化である。労働のこの実現が労働者の現実性剥奪として現れ、対象化が対象の喪失および対象への隷属として、〈対象〉の獲得が疎外として、外化として現れる」、そして「労働者は、彼が富を多く生産すればするほど、彼の生産の力と範囲とが増大すればするほど、それだけますます貧しくなる。労働者は商品を多くつくればつくるほど、それだけますます彼は安価な商品となる。労働は単に商品だけを生産するのではない。労働は自分自身と労働者とを商品として生産する³⁷⁾」という結果にいたる。

疎外の第2形態：生産活動、労働そのものから労働者の疎外が考察される。労働生産物からの労働者が疎外されるという結果が生じたのは、その結果を生む過程、つまり労働、生産活動が労働者から独立しているからにほかならない。「労働の外化は、労働が労働者にとって外的であること、すなわち、労働が労働者の本質に属していないこと、そのため彼は自分の労働において否定され、幸福と感ぜずにかえって不幸と感じ、自由な肉体的および精神的エネルギーがまったく発展させられず、かえって彼の肉体は消耗し、彼の精神は退廃化するということになる。だから、労働者は労働の外部ではじめて自己のもとにあると感じ、そして労働のなかでは自己の外にあると感じる。労働していないとき、家庭にるように安らぎ、労働しているとき彼はそうした安らぎをもたない。そのため労働は、自発的なものではなく強いられたものであり、強制労働である。その労働は、ある欲求の満足ではなく、労働以外のところで諸欲求を満足させるための手段であるに過ぎない³⁸⁾」。人間の自己疎外と呼ばれる過程である。

36) K. Marx, *Okonomischen-philosophische Manuskripte*, = 城塚登訳, 1964年『経済学・哲学草稿』岩書店(岩波文庫), 城塚登, 1972年, 『新人間主義の哲学—疎外の克服は可能か』日本放送協会(NHKブックス), 根橋正一, 2009年「労働と遊びの社会学序説」『流通経済大学社会学部論叢』Vol.19. No.2(通巻38)流通経済大学出版会

37) マルクス『経済学・哲学草稿』86-87ページ

38) 同上書 91-92ページ

疎外の第3形態：類的存在からの人間疎外である。第2の疎外で示したように、人間は生産活動から疎外されるのであるが、それは人間の類的連帯を支える活動から疎外されることである。類的存在とは、社会的生産活動であり、他の人間との現実的社会的結合の中で自分を発現し、確証する活動である。生産活動から人間疎外されるので、類的生活、類的活動である生産活動は、個人的生存のなめの手段となってしまう。

疎外の第4形態：人間からの人間の疎外である。これは他の人間からの人間疎外、つまり人間相互の対立を意味している。生産手段の私有を基礎とする資本主義社会においては、労働生産物は労働者自身に属さず、疎遠な力として対立した。そのとき労働生産物は誰に属しているかといえば、それは他の人間に属している。それは非労働者、つまり生産手段を私有している人間、資本家に属しているのである。したがって、生産手段を私有している資本化と労働（力）を商品として売ることによって生活する労働者との階級的対立を意味している³⁹⁾。

(2) ホワイトカラーの疎外

マルクスが分析したのは工場における賃労働であったが、その後近代資本主義は工場におけるブルーカラー労働者以上にホワイトカラー労働者を大量に必要とするようになったが、ホワイトカラーもまた人間疎外を体験することになった。その研究としてはミルズのものがある。アメリカの社会学者C.ライト・ミルズは、その著『ホワイトカラー⁴⁰⁾』において、1950年代台頭しつつあったホワイトカラー層を分析するなかで、彼らの仕事における疎外および余暇活動の台頭にも言及している。この著書にそってミルズの見たところを整理しよう。

分業と労働疎外

ミルズは、近代産業の労働の分業から労働の疎外が始まるという。

分業とは、特定の個人が、労働の最終生産物に至るまでの全過程を手がけることがないという意味であるが、それはまた、近代的な条件下では、その過程そのものが彼には見えないということをも意味している。彼の労働の目標である生産物は、法的にも心理的にも彼から切り離され、同時に労働の技術性に付随していた意義も奪い去られてしまった。賃金労働や下級のホワイトカラー的職種はもちろんのこと、専門職においてさえ、官僚制の発展による決定権の集中化と形式的な合理主義のた

39) 同上書 100ページ

40) C. Wright Mills, 1951, "White Collar: The American Middle Class" Oxford University Press = 1957年 杉政孝訳『ホワイトカラー—中流階級の生活探求—』東京創元社

めに、個人の本質と合理性を行使し発展させる機会が失われつつある⁴¹⁾。

ホワイトカラーが巻き込まれた分業はさらに官僚制機構に支配され、疎外された労働に縛り付けられてしまう。

新しい分業組織は、その初期の段階においては、労働者を専門化せしめることによって彼らの技術レベルを向上せしめるであろうが、やがて分業の進展にともなって各部門の幅はきわめて狭くなり、また多数の部門の犠牲によって、ある特殊の部門だけを発展せしめるようになる。そして機械化と集中的な官僚機構の発達に助けられて、分業がいつそう徹底的に進められると、人々は平均化され、いわば自動機械的存在になってしまう。この段階では、少数の専門家と多数の自動機械的労働者層が存在するということになるが、その両者ともより高次の権威によって統制されており、それによって相互依存の関係に立たされ、各人は自分に割り当てられた習慣的な決まりきった仕事に縛り付けられている。こうして分業は労働者各個人の固有の技術を行使し発展せしめる機会と可能性を奪い統制下においてしまう⁴²⁾。

その結果、労働活動ばかりでなく他の生活分野にまで疎外される。

ホワイトカラーには自己の労働活動を統制する自由がないから、やがては慣習的に他人の命令に従って働くようになり、たとえ自由に行動しようとする欲求をもっていても、労働以外の生活分野でその欲求を充たそうとする。彼らはその労働から何も学びとっておらず、労働を通じて自我を発展させていないから、やがては他の生活分野においても、自我の発展に対する興味と欲求を失ってしまうであろう。彼らの労働と遊び、労働と教養のあいだには、分裂があるから、やがては、彼らはその分裂を当然のこととして受け止めるようになるだろう。かれらにとって生計の資を得るための労働そのものは、労働以外の生活面において真の生活とはいえないから、労働以外の生活面において真の生活を建設しようとし、こうして労働はそのための単なる手段となり、労働自体は時間の浪費以外の何者でもなくなる⁴³⁾。

余暇活動への注目

以上のようなホワイトカラーにとって、疎外された労働を補完するものとしての余暇が注目されることになった。

41) 同上書 209ページ

42) 同上書 210-211ページ

43) 同上書 212ページ

余暇を楽しむ娯楽活動は、大量生産的にはなかったが、この変化で心理学的に重要な点は、労働の福音をといいた旧中流階級の労働倫理が、余暇の倫理に置き換えられてしまい、それは同時に労働と余暇とをきわめて対照的にほとんど別世界のように分離させてしまったことである。今では、労働の価値を定めるものは労働自体ではなく、その労働によって楽しみうる余暇の価値によって定まる。余暇の領域に含まれるすべてのものが、労働の価値を判定する基準となる。労働に含まれる意義は実は余暇によって与えられたものなのである。労働以外の領域での価値こそ真に追求すべき人間が、そのための手段であるはずの労働において、真剣にならざるをえないことを意味する。労働しているときは、彼は笑うことも、歌うことも、場合によっては話すこともできず、ただ規則にしたがって、企業という神に奉仕しなければならない。労働中は権力に支配されて真剣に努力する強制される労働者にとっては、この真剣さから離れて、ホッと一息つけるときがまさに彼の余暇となる⁴⁴⁾。

しかし、人びとを労働から解放するはずの余暇は労働の目的となり、両者は分裂して、労働はそれ以外の何者ももたらすことのないものであり続けることになる。

労働しなければならないのに、しかもその労働から疎外されているので、その労働は非常に苦しいものを感じられる。人びとは夜と休日を娯楽と余暇を購う金を得るために、毎日の昼間は自己を売っている。疎外的な労働によって分裂した彼のパーソナリティーは、娯楽や恋愛や性的刺激に没入し興奮することによって、ふたたびある意味での統一を回復する。しかしそのときまったく別種の人間になっている。こうして労働と余暇の循環によって、相異なる2種の自我のイメージが交互に前面に出てくる。すなわち、労働にもとづく平日のイメージと余暇にもとづく休日のイメージである。後者は著しく空想的、かつ熱情的であり、それは大衆媒体を通じて供給されるパーソナリティーや事件を主題として構成されている。一週間の単調な労働生活の後に、楽しい期待と計画にあふれた週末が続き、ふたたび苦しい労働に戻るリズムが繰り返される。働き続けてきた一週間とはまったく別世界のごとき休日は、人々を灰色の暗い労働の場から引き出して、それとは極端に対照的な明るい余暇の場にいざなう⁴⁵⁾。

近代において人びとの活動の主な目的は余暇活動となり、労働はそのために耐えなければならない辛い活動となった。労働のもたらす喜び、充実感、自己実現といったイ

44) 同上書 219-220ページ

45) 同上書 221ページ

メージは余暇もしくは家族生活によってしか達成されないのだろうか。多くの研究がおこなわれることになる。

本節では、近代産業労働の疎外に関する研究を見てきた。今や人びとにとって余暇が人生の目的にならざるをえない状況が到来したかに見える。しかし余暇もまた、疎外された消費の中にあるということもできるし、余暇も産業化して新たな疎外労働の場となることも予想される⁴⁶⁾。その予想通り新たに興隆してきた余暇産業ばかりでなく、さまざまなサービス産業に加え福祉産業、医療産業における労働もまた疎外労働を強制されている。このことに着目して研究が始まったが、それはホックシールドからであった。

2. ポストモダン産業における感情労働と疎外

ホックシールドは『管理される心⁴⁷⁾』で感情労働についての先駆的研究を行い、なかでも感情労働の疎外論は注目されている。

ホックシールドは、賃金報酬のために実行される感情実務あるいは感情管理を感情労働と呼んでいる。大衆と対面もしくは発声によって接触することを必要とし、他者のうちに肯定的な意思否定的な感情状態を生み、そして感情的活動に対する監視と管理を継続しなければならないような職種である。ホックシールドはその著の中で、その職種の極端な事例として旅客乗務員と借金取りを事例としている。

旅客乗務員は慎重な審査にもとづいて採用され、広範囲にわたる訓練を受ける。他方、借金取りはほとんど訓練を受けず、転職率も高い。旅客乗務員の仕事は顧客の地位を優位にする、顧客のいい気分にさせるのに対して、借金取りの仕事は顧客の地位を低め、恥ずかしい思いをさせる。旅客乗務員の状況は、顧客との相互作用において親密で、個人的であるのに対して、借金取りの仕事における関係は没個人的で自己防衛的である⁴⁸⁾。

相手に何か売りつけ、あるいは相手のうちに特定の気持ちを喚起するために行う特定の気持ちの「開示」は、私的な目的ではなく、事業のために気持ちを利用することになる。繰り返し幾度も感じられる気持ちが内面の気持ちといつも乖離していると、自己疎外、疎外そして不本意という気持ちを表面化しやすい。ホックシールドは現代の世界における自己疎外は、個人がしなければならないことと、個人がそれをどのように感じて

46) 根橋正一、前掲論文、85ページ

47) Arlie Hochschild, 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press, = 石川准・室伏亜希訳, 2000年, 『管理される心—感情が商品になるとき』世界思想社

48) Jonathan H. Turner and Jan E. Stets, 2005, *The Sociology of Emotions*, Cambridge University Press = 正岡寛司訳, 2013年, 『感情の社会学理論—社会学再考』明石書店, 89-90ページ

いるかの関係を制御できない時に発言すると論じる⁴⁹⁾。

ホックシールドにおける感情労働に伴う疎外について、マルクスの疎外論の文脈で考察しておこう。まずマルクスの疎外論は工場労働者の生産物が労働者のものでないことから始まる。では、感情労働の生産物とは何か、そしてそれは誰に属するのかを考えてみよう。ホックシールドは、「財を生産する社会において財から疎外されるとしたら、サービスを生産する社会においてはサービスから疎外される」と総括している。感情労働はサービスを生産しており、労働者はサービスから疎外されるというわけである。ところで、感情労働は、ネグリとハートが論ずる非物質的な労働であると考えられるが、それらが生産する生産物は知識や情報、コミュニケーション、関係性、といった非物質的な成果である。また安心感や幸福感、満足、情熱といった情動を生み出したり操作したりする仕事は、フライトアテンダントやファーストフード店店員などにみられる。⁵⁰⁾ 生産されるサービスとはネグリらが言うような抽象的で感情的な生産物である。

フライトアテンダントやファーストフード店員が客にその笑顔とともにもたらしたのは、安心感とか満足感などといった感情であり、良好なあるいはまずい関係性である。客の中に生じた感情、乗務員と客との関係性は誰のものであろうか。客の持った満足感やフライトアテンダントとの良好な関係は客自身のものとなり、良き思い出になったであろう。他方客の満足感や関係性は乗務員自身に属すのではなく、雇用者である航空空会社に属するのである。もちろん客との良好な関係性は乗務員にとっても良き思い出になる場合もあるかもしれないが、それらはいずれも航空会社の評価・成果となる。逆に客の不満足や不安感、乗務員とのまずい関係は悪い評判となって乗客の減少につながり航空会社の経営には大きな損失になる。そのため航空会社は客に不満足感やまずい関係性が発生しないように、乗務員への教育と監視、管理を強化することになる。

感情労働の疎外についてもう一点指摘しておくべきである。前述したようにマルクスは「労働者は商品を多くつくればつくるほど、それだけますます彼は安価な商品となる。労働は単に商品だけを生産するのではない。労働は自分自身と労働者を商品として生産する」としているが、感情労働は表層演技・新装演技によって自分の感情のコントロールを要する労働であるので、自らの商品化は大きな特徴となる。

感情労働者は客のためにサービスや諸関係を生産しているが、それは客のために自分自身を商品として生産し提供しているのである。労働主体自身が商品として生産され客に供されているのである。主体は主体であると同時に生産された商品である、すなわち疎外体であるのだ。サービス労働、福祉労働、依存労働はその点で本質的に疎外された労働に従事しているのである。

49) 同上書、91ページ

50) ハートとネグリ、『マルチチュード』185ページ

感情労働に関するターナーらの総括も厳しい点を表現している。

(工場労働が)労働者の疎外を募らせるだけではなく、さらに労働者の心をも支配しながら彼らを屈服させる。組織体は行為者を深層水準で支配する。つまり個人の私的で内面的な経験が操作されるのだ。労働が本来の気持ちの表現を許さなければ、自分の気持ちは自己にとって何の意味も持ちえない。そのため労働者は、自分が何者であるかについて虚偽意識を体感する。個人が職場で長時間にわたって過ごし、しかも仕事と自己が一体化しているほど、自己の感情を否定するよう仕向ける労働に起因する虚偽感情が、家族や親密な関係など別な領域にまで持ち越されやすい⁵¹⁾。

こうして現代の感情労働もまた、疎外労働のメカニズムから逃れることはないであり、その帰結には3つのパターンがある⁵²⁾。第1は労働者があまりにも一心不乱に仕事に貢献し、そのために燃え尽きてしまう危険性のあるケースであり、第2は労働者が自分自身を職務と切り離しており、「私は演技をしているのであって不正直だ」と自分を非難する可能性のあるケース、第3は自分の演技から自分を区別しており、演技することから疎外され「私たちはただ夢を売っているだけだ」と皮肉な考えをもってしまう危険のあるケース、である。これらは人間が感情労働に支払う代償であり、労働による人間疎外の表れということが出来る。

まとめ

本稿では現代の労働に関するいくつかの議論を見てきた。ポストフォーディズム、グローバル時代の労働は新たに主流となった情報産業、サービス産業、福祉産業などに従事する非物質的労働に代表されるものであった。モダン、産業段階の主要な労働が商品生産やその流通であったのに対して、非物質的労働の生産するのはサービスであるとか知識あるいは感情、関係性であるとかを主としている。これらの労働分業はこれまで以上に激しい階級・格差を創出する傾向をもっていた。知識を生産する知識労働に従事するごく一部が、比較的経済的にも恵まれた階級を構成する一方で、サービスや感情、関係性を生産する情動労働は疎外労働を通して身体ばかりでなく感情的精神的にも搾取される低賃金労働の階級を構成する。こうしたポストモダン労働は「労働の女性化」や「労働者の移動」をも特徴としている。サービス労働やケア労働などはもちろん女性的なやさしさやきめ細やかさ、華やかさが求められるうえに、女性的ジェダー労働とみな

51) ターナー、前掲書、92ページ

52) ホックシールド、前掲書、214ページ

されて低賃金であることが当然視されている。

男は外で公的産業セクションでの労働を通して経済活動に参加し、女は家庭内で支払われることのない依存労働やケア労働に従事するという分業の体制は、労働の形態が変化したポストモダン段階でも残存している。というより、形を変えて抑圧や格差の正当化に利用されている。家庭内で女性が分担していた依存労働やケア労働は、女性の社会進出、すなわち公的セクションにおけるそれまで男性が独占していた労働現場への進出により社会化、外部化され産業化されることになった。つまり、ケアや介護、保育などの福祉産業は、専門職化、資格化の努力もかわらず、もともと無料の家庭内労働であったことに起因して相変わらず低賃金で威信のない状態に置き去られているのである。サービス労働にしても同様に女性的なやさしさ、華やかさなどが重要なポイントであり、サービス提供の技術ばかりでなく笑顔までもがマニュアル化された労働として誰もができる比較的価値の低い、低賃金労働として扱われ続けている。

この困難な現代において我々はどのような研究へ進めばよいのだろうか。サービス労働や福祉労働における労働のジェンダー化を阻止するような方策を求める研究か、現代の資本主義に対する革命理論を構築するのか、この労働世界からの逸脱する手立てを考えるのか、現代の産業状況でより有利なポジションを得るための研究をするのか、あるいはこうした労働から距離のある地方における農業林業漁業などに関する研究を行うのか、いずれにしても依存労働者やサービス労働者といった低賃金にあえぎ自分に誇りを持ってない状況に押し込められている人々の解放のための研究がなされなければならない。1960年代から70年代の世界の労働者・市民・学生が疎外と公害のモダンを批判し拒否したように、我々は今を批判し、未来を構想する力をもたなければならない。